

最新
名曲解説
全集

I

交響曲 I

音楽之友社



最新
名曲解説
全集

I

交響曲 I

音楽之友社



最新名曲解説全集

第 1 卷

交響曲 I

●

著作権所有

複製・翻訳・転載を禁ず

●

昭和54年11月 1 日第 1 刷発行
昭和57年 4 月15日第 8 刷発行

●

編者

音楽之友社

発行者

浅香淳

発行所

株式会社 音楽之友社

東京都新宿区神楽坂6-30 郵便番号162

電話(03)268—6151(代) 営業部(03)202—4291(代)

振替：東京 7-196250

●

© 1979, Ongaku no tomo sha corp., Tokyo Japan

●

定価 2,500円

0777 ISBN4-276-01001-2 C1373 ¥2500E

錦明印刷株式会社／合資会社黒田製本所

音楽之友社の

最新名曲解説全集

〔全24巻〕

〔補巻全3巻〕

〔別巻〕

補巻1 交響曲・管弦楽曲・協奏曲

補巻2 室内楽曲・独奏曲

補巻3 歌劇・声楽曲

別巻

総索引

〔作曲家別
楽曲別〕

各巻——二五〇〇円

第1巻	交響曲 I
第2巻	交響曲 II
第3巻	交響曲 III
第4巻	管弦楽曲 I
第5巻	管弦楽曲 II
第6巻	管弦楽曲 III
第7巻	管弦楽曲 IV
第8巻	協奏曲 I
第9巻	協奏曲 II
第10巻	協奏曲 III
第11巻	室内楽曲 I
第12巻	室内楽曲 II

古今の名曲を精選して全二十四巻と補巻全三巻に集約。楽界の權威百三十余氏が各自の専門分野に、最新の研究成果を盛りこみ、懇切に解説した。収録した曲数は、旧全集の約四割増しとし、新たに邦人作品も加え、広範な要請に応えられるように努めた。

解説は、できるだけ音楽用語を統一し、譜例を豊富に引用、精密かつ高度なものとした。楽曲の理解を助け、名曲のもつ香りたかい味わいを、すべての音楽愛好者のものとするために欠かせぬものである。学校・図書館・家庭で音楽鑑賞の手引きの基本となる全集。

第13巻	室内楽曲 III
第14巻	独奏曲 I
第15巻	独奏曲 II
第16巻	独奏曲 III
第17巻	独奏曲 IV
第18巻	歌劇 I
第19巻	歌劇 II
第20巻	歌劇 III
第21巻	声楽曲 I
第22巻	声楽曲 II
第23巻	声楽曲 III
第24巻	声楽曲 IV

序 文

旧版の全十八巻の「名曲解説全集」の第一巻「交響曲(上)」がはじめて世にでたのは昭和三十四年六月である。その当時には、この全集は画期的な企画として注目され、内容的にも良心的であるとして評判を呼んだ。しかしそれから二十年も経ると、音楽の研究はすすみ、新しい資料も発見され、また楽譜やレコードの発売も多種多様になり、演奏会でとりあげられる曲目もきわめて広範にわたるようになった。

そうしたことで、「名曲解説全集」の改訂を要望する声も大きくなり、新たに改訂のための編集委員会を組織して、その検討をはじめたのである。その結果、収録する曲目も従来のものより四〇五割増加という多数におよび、巻数も全二十四巻ということになった。もちろん、その解説には、それぞれの方面の権威の執筆者各位にお願いし、新しい研究成果を盛りこんでもらうようにした。

いうまでもなく、この新版の全集では、聴く機会の多い曲はすべて網羅するようにつとめたが、それでもなお収録しきれない作品が出てきた。そこで補巻として三巻を追加したが、まだ今後収めなければならぬ作品もでてくることだろう。しかし、そのような特殊な作品をのぞけば、補巻三巻を加えた本全集は、音楽愛好者および音楽研究者にとって必要欠くべからざるものになるに違いない。その意味で譜例も多くのせるようにしたし、解説もできるだけ平易な用語でしかも内容的にはできるだけ精密で高度なものとした。これだけの充実した解説全集は、欧米諸国にも例をみないといっても過言ではない。しかし、多くの読者の方々が利用されるにつれて、いろいろと疑問点や不備な点が目につくようになるかもしれない。編集者はその点には十分に留意した積りだが、読者の方からの御意見は謙虚な気持ちで受けとめたいと思う。

監修者代表 門 馬 直 美

監修者

海老沢 敏

柴田 南雄

服部 幸三

濱田 徳昭

藤田 由之

皆川 達夫

三善 清達

門馬 直美

(五十音順)

第一巻執筆者

磯山 雅

入野 義朗

岩井 宏之

海老沢 敏

大木 正興

大久保 一

大宮 真琴

川端 真由美

久納 慶一

坂本 良隆

清水 脩

菅野 浩和

第一巻校閲者

門馬 直美

高野 紀子

田辺 秀雄

武川 寛海

辻 莊一

中野 博詞

藤田 由之

堀内 敬三

村田 武雄

門馬 直美

渡辺 千栄子

渡辺 護

(五十音順)

凡例

一、本巻には交響曲およびそれに準すべき作品を収めた。

一、配列は作曲家の生年順により、同年生まれの場合は没年順に従った。

一、楽曲の配列は、原則として作曲年代順にした。

一、作曲家名、作品名、楽語等は「標準音楽辞典」(音楽之友社)、「新音楽辞典・楽語」(音楽之友社)、「音楽索引」(小川昂編、民音音楽資料館)に準拠した。

一、選曲については、わが国でしばしば演奏されるもの、もしくはレコードの出ているものを基準とした。邦人作品の選曲は音楽之友社のアンケート調査にもとづいた。

一、解説の執筆者名は、曲の最後に、()をもって示した。

一、旧全集の解説を本全集にひきつづき掲載する作品で、その執筆者が研究活動を退いている場合は(物故者を含む)、新たな研究者に校閲を願った。なお、解説末尾の()には、旧全集の執筆者名を、校閲者名は右頁の校閲者欄に各巻一括してこれを示した。

楽器名略語表

Str. ———— 弦 楽 器

Vn.	ヴァイオリン
Vn. I	第1 ヴァイオリン
Vn. II	第2 ヴァイオリン
Va.	ヴィオラ
Vc.	チェロ
Cb.	コントラバス
Hrp.	ハープ

W.W. ———— 木管楽器

Picc.	ピッコロ
Fl.	フルート
Ob.	オーボエ
E.H.	イングリッシュ・ホルン
Cl.	クラリネット
B.Cl.	バス・クラリネット
Fg.	ファゴット (バスーン)
Cfg.	コントラファゴット
Sax.	サクソフォン

B.W. ———— 金管楽器

Cn.	コルネット
Trp.	トランペット
Tbn.	トロンボーン
Hr.	ホルン
Tuba	チューバ

Perc. ———— 打 楽 器

Timp.	ティンパニ
G.C.	大太鼓
T.Mil.	小太鼓
Tamb.	タンブリン
Cymb.	シンバル
Tam.	タム・タム
Trg.	トライアングル
Bell	ベル (鐘)
Mar.	マリンバ

その他

Pf.	ピアノ
Harm.	ハーモニウム
Org.	オルガン
Cel.	チェレスタ

目次

序文	一
第一巻執筆者（五十音順）	二
凡例	三
楽器名略語表	四
概説「交響曲の発達」	一一
ボイス	
シンフォニア（全八曲）	一八
C・P・E・バッハ	
シンフォニア WQ一八二（全六曲）	二四
シンフォニア WQ一八三（全四曲）	二八
J・W・シュターミツ	
交響曲 ニ長調 作品三の二	三三
L・モーツァルト	
おもちゃの交響曲 ハ長調	三六
ハイドン	
ハイドンの交響曲	三八
交響曲 第一番 ニ長調	三九
交響曲 第六番 ニ長調「朝」	四三
交響曲 第七番 ハ長調「昼」	四七
交響曲 第八番 ト長調「晩」	四七
交響曲 第三一番 ニ長調「ホルン信号」	四八
交響曲 第四四番 ホ短調「悲しみ」	五三
交響曲 第四五番 嬰ヘ短調「告别」	五五
交響曲 第四八番 ハ長調「マリア・テレジア」	五七
交響曲 第四九番 ヘ短調「受難」	五九
交響曲 第七三番 ニ長調「狩」	六三
パリ交響曲概説	六五
交響曲 第八二番 ハ長調「熊」	六六
交響曲 第八三番 ト短調「牝鶏」	六八
交響曲 第八五番 変ロ長調「王妃」	七一

交響曲 第八六番	ニ長調	七四
交響曲 第八八番	ト長調	七五
交響曲 第九二番	ト長調	七六

「オックスフォード」

第一期ザロモン交響曲概説	ハ
交響曲 第九三番	ニ長調 八六
交響曲 第九四番	ト長調「驚愕」 九三
交響曲 第九五番	ハ短調 九六
交響曲 第九六番	ニ長調「奇跡」 一〇三
交響曲 第九七番	ハ長調 一〇八
交響曲 第九八番	変ロ長調 一一三
第二期ザロモン交響曲概説	一一七
交響曲 第九九番	変ホ長調 一二〇
交響曲 第一〇〇番	ト長調「軍隊」 一二四
交響曲 第一〇一番	ニ長調「時計」 一二九
交響曲 第一〇二番	変ロ長調 一三三
交響曲 第一〇三番	変ホ長調「太鼓連打」 一三八
交響曲 第一〇四番	ニ長調「ロンドン」 一三九
協奏交響曲	変ロ長調 一四一

J・C・バッハ

ヴァイオリンとチェロのための協奏交響曲

イ長調

二つのヴァイオリンのための協奏交響曲

変ホ長調

シンフォニア 作品一八（全六曲）……………一五四

C・シュターミツ

交響曲 変ホ長調 作品一三の一……………一六三

モーツァルト

モーツァルトの交響曲……………一六四

交響曲 第一番 変ホ長調 K一六……………一六五

交響曲 第八番 ニ長調 K四八……………一六八

新ランパッハ交響曲 ト長調

KAnh二二一(K[♭]四五a)……………一七〇

交響曲 第一番 ニ長調 K八四(K[♭]七三q)……………一七三

交響曲 第一三番 ヘ長調 K一一二……………一七六

交響曲 第一九番 変ホ長調 K二二一……………一七九

交響曲 第二五番 ト短調

K一八三(K[♭]一七三dB)……………一八三

交響曲 第二六番 変ホ長調

K一八四(K[♭]一六一a)……………一八八

交響曲 第二七番 ト長調

K一九九(K[♭]一六一b)……………一九二

交響曲 第二八番 ハ長調

K二〇〇(K[♭]一八九k)……………一九五

交響曲 第二九番 イ長調

K二〇一(K[♭]一八六a)……………一九九

交響曲 第三〇番 ニ長調

K二〇二(K⁶一八六b)三〇三

交響曲 第三一番 ニ長調「バリ」

K二九七(K⁶三〇〇a)二〇六

交響曲 第三二番 ト長調K三一八二二

交響曲 第三三番 変ロ長調K三一九二四

交響曲 第三四番 ハ長調K三三八三八

交響曲 第三五番 ニ長調「ハフナー」

K三八五三三

交響曲 第三六番 ハ長調「リント」

K四二五三六

交響曲 第三八番 ニ長調「ブラハ」

K五〇四三〇

交響曲 第三九番 変ホ長調K五四三三五

交響曲 第四〇番 ト短調K五五〇三九

交響曲 第四一番 ハ長調「ジュピター」

K五五一四三

協奏交響曲 変ホ長調K二九七b四七

協奏交響曲 変ホ長調K三六四五

ベートーヴェン

ベートーヴェンの交響曲二五

交響曲 第一番 ハ長調 作品二一二五

交響曲 第二番 ニ長調 作品三六二六

交響曲 第三番 変ホ長調「英雄」作品五五二六

交響曲 第四番 変ロ長調 作品六〇二七

交響曲 第五番 ハ短調「運命」作品六七二九

交響曲 第六番 ヘ長調「田園」作品六八二九

交響曲 第七番 イ長調 作品九二二九

交響曲 第八番 ヘ長調 作品九三二九

交響曲 第九番 ニ短調「合唱付」

作品一二五二九

ウェーバー

交響曲 第一番 ハ長調二〇

交響曲 第二番 ハ長調二〇

シューベルト

シューベルトの交響曲三四

交響曲 第一番 ニ長調三五

交響曲 第二番 変ロ長調三九

交響曲 第三番 ニ長調三三

交響曲 第四番 ハ短調「悲劇的」三六

交響曲 第五番 変ロ長調三九

交響曲 第六番 ハ長調三一

交響曲 第八番 ロ短調「未完成」三五

交響曲 第九番 ハ長調「グレイト」三八

ベルリオーズ

ベルリオーズの交響曲	三五四
幻想交響曲 作品一四a	三四五
「レリオ、生への復帰」 作品一四b	三五二
「イタリアのハロルド」 作品一六	三六〇
「ロメオとジュリエット」 作品一七	三六二
「葬送と勝利の大交響曲」 作品一五	三六九

メンデルスゾーン

交響曲 第一番 ハ短調 作品一	三六四
交響曲 第二番 変ロ長調「讃歌」 作品五二	三七七
交響曲 第三番 イ短調「スコットランド」	三八二
作品五六	三八二
交響曲 第四番 イ長調「イタリア」	三八六
作品九〇	三八六
交響曲 第五番 ニ短調「宗教改革」	三八九
作品一〇七	三八九

シューマン

シューマンの交響曲	三九三
交響曲 第一番 変ロ長調 作品三八	三九四
交響曲 第二番 ハ長調 作品六一	三九六
交響曲 第三番 変ホ長調「ライン」	三九九
作品九七	三九九

交響曲 第四番 ニ短調 作品一二〇	四〇八
-------------------	-----

ブルックナー

ブルックナーの交響曲	四一三
交響曲 第〇番 ニ短調	四一四
交響曲 第一番 ハ短調	四一八
交響曲 第二番 ハ短調	四二四
交響曲 第三番 ニ短調	四三一
交響曲 第四番 変ホ長調「ロマンティック」	四三七
交響曲 第五番 変ロ長調	四四〇
交響曲 第六番 イ長調	四四六
交響曲 第七番 ホ長調	四五二
交響曲 第八番 ハ短調	四五六
交響曲 第九番 ニ短調	四六二

装 菊	池
本文構成	道 吉
協力	剛
	(株)クリエートハウス

第1卷

交響曲
I

概説

交響曲の発達

シンフォニアの誕生 交響曲は、英語のシンフォニー (Symphony) およびその同系語の訳である。そして、このシンフォニーという語は、元来はイタリア語のシンフォニア (Sinfonia) という言葉から派生したものである。そして、言葉だけの問題にとどまらず、交響曲という音楽のジャンルの発生そのものも、歴史的にみて、シンフォニアと密接な関係をもっている。ただし、シンフォニアは、時代によっていろいろな意味をもっていたのである。

シンフォニアは、ギリシア語に由来する言葉であって、「さまざまな音が協和してひびく」ということを意味した。つまり、これは、音楽そのものを表現するわけでもあった。それだけに、シンフォニアは、音楽の歴史のなかで多様な意味をもっていたのであり、十七世紀以前には、声楽曲に対しても、シンフォニアという語が用いられたことがある。しかし、後期バロック時代に器楽曲が勢力をもつようになってからは、シンフォニアという言葉は、器楽曲の分野で主として使われるようになった。

このバロック時代には、器楽曲に対して、シンフォニア、ソナタ、カンツォーナ、コンチェルトその他の語が使われていて、

そのなかのシンフォニアは、とくに祝典とか祝祭のための導入の音楽を指すようになった。そして、このシンフォニアは、ファンファール風な音形と荘重で豊麗なひびきをもっているのが普通で、多くの分野に影響をおよぼした。こうして、やがてカンタータやオペラの導入の音楽として、シンフォニアの語が使われるようになった。カンタータのシンフォニアは、序奏あるいは導入曲ともいべきもので、声楽はおいていない。オペラでは、ナポリ派のアレッサンドロ・スカラッティ (一六六〇—一七二五年) あたりを先駆として、シンフォニアは、急—緩—急の三部的な構成の序曲となった。こうした形のオペラ「シンフォニア」は、一六八一年ごろにスカラッティがオペラ「悪より善へ」ではじめて使ったといわれている。そのシンフォニアは和声的な音楽であり、両端部と中間とをはっきりと対比させている。そして、やがてナポリ派ばかりでなく、イタリア各地のオペラの作曲家も、この形のシンフォニアを序曲に採用した。

一七三三年のベルゴレージ (一七一〇—一七三六年) のインテルメッツォ「奥様女中」をきっかけとして、軽妙で喜劇的なオペラ・ブッフアがあらわれてくる。そして、このオペラ・ブッフアも、ナポリ派のシンフォニア (イタリア式序曲) をオペラに先行させた。このシンフォニアの両端部は、聴衆の心をとらえるようにとくに工夫され、効果的な力性的変化をおいたり、テンポを高潮させたり、活動的で華麗であったりする。しかも各部は、すでに楽章ともいえるほどの充実さと独立性をもつよ

うになってきた。それに加えて、シンフォニアの管弦楽編成は、オペラ以外のオーケストラにとっても、ほぼ基準となった。それは、旋律的な指導権をとる第一ヴァイオリン、それに従属する他の弦楽器群、それと二本ずつのオーボエとホルンという編成だった。

こうしたことと並行して、シンフォニアは、オペラからはなれて、単独で演奏会でもとりあげられるようになった。その結果、シンフォニアの楽譜だけが残り、オペラの本体の楽譜が失われ、そのシンフォニアが本来どのオペラの序曲だったのかわからないということもおこった。そして、これに刺激されて、まずイタリアで演奏会用のシンフォニアがあらわれた。これは、もう交響曲（シンフォニー）というべきものである。

イタリアの初期交響曲、演奏会用の初期のシンフォニア、つまり交響曲の最初のすぐれた作曲家は、ジョヴァンニ・バッティスタ・サンマルティーニ（一六九八—一七七五年）である。それにルイジ・ボッケリーニ（一七四三—一八〇五年）がつづく。サンマルティーニは、すでにオペラ・シンフォニアの第一部にみられた対比する二種の動機の設定を、対比する主題というものにまで拡大し、ソナタ形式の呈示部の形をととのえるようにした。

つづく展開部では、主題の動機的处理をみせる。しかも、サンマルティーニは、この第一部で好んで対位法的書法もみせたのである。ゆるやかな第二部に対しては、サンマルティーニは、

カンタービレの性格を生かすと同時に、これまでのオペラ・シンフォニアの場合よりも規模を大きくし、充実感をおくようにした。第三部は、従来のものと八分の三拍子が主体だったが、サンマルティーニは、もっとテンポのおおきい四分の三拍子のテンポ・ディ・メヌエットにすることが多かった。

サンマルティーニの交響曲は、大きな影響力をもっていたが、ボッケリーニのものも、影響力ではそれに劣らなかった。このボッケリーニの交響曲は、いかにも多作で器用なこの作曲家のものらしく、ととのった形式と手際のよいオーケストレーションをみせ、しかもわかりやすさもそなえている。

この二人のほかに、初期のイタリアの交響曲の作曲家をあげるとすれば、表情の豊かさで注目されたガエターノ・ブルネッティ（一七四〇？—一八〇八年）、抒情的な作風をみせたガエターノ・ブニャーニ（一七三一—一七九八年）がいる。

この間に、オペラ・シンフォニアでも、急速な第一部の形式の整備がすすめられ、それが第一楽章に相当するものに接近していった。なかでも二つの主題を対比させる方法は、交響曲の作曲家にもアイディアを提供することになった。

しかし、イタリアは、音楽の主導権をオペラにとられて、十九世紀に入ると、交響曲の分野ではめばしい作品を生みださなくなってしまった。

北ドイツの初期の交響曲 北ドイツでも、イタリアとはほぼ同じような経過をたどって、演奏会用の交響曲があらわれてくる。